

海外研修報告

—メキシコとニューヨーク州を中心に—

戸 莉 進

I はじめに

思いもよらぬ旅 昨年の9月25日から、10月24日までのまる1カ月、文部省の昭和49年度長期派遣海外教育事情視察団第15団30名の一人として、研修旅行をする機会が与えられたが、これは私にとっては二重の意味で全く思いもよらぬものであった。

というのは、一つには前年の48年にも、いろいろのヴィジョンを描きながら、ドイツと北欧の研修の希望を提出しておいたのが、不発に終わったこともあって、今回については、裏目に出た時のやり切れなさを思っ

て当初から、かなり諦めてかかっていたからである。ところが、それが今回は実現してしまったのである。そして二つには、実は具体的な訪問国についてであるが、応募の調書に書いて提出した希望の国名と、中心課題は、前回と同様にドイツと北欧、そして国民高等学校の伝統と現代化ということであったところに、どこの、どういう手違いか、私の手許に届けられた決定を知らせる正式書類は、所属団の通知書と、教員海外派遣者の心得のみで、(7月上旬の第1回事前打合せ会に出席して初めて判ったことであったが)肝心の行先や日程その他の詳細をまとめた打合せ会資料が全く脱落していたのである。それで、私としては当然こちらの希望が叶えられたものと信じて、学期末の忙しい中の寸暇を割いては、ドイツや北欧の教育を中心にいろいろ勉強して、調査事項書の3枚も、その線でまとめたものを持って打合せ会に出席したのであった。ところが実は私の行き先の中心は、ドイツや北欧ではなく、メキシコとニューヨーク州であることを、7月4日になって、やっと知らされ、しかも旅程の概略は既に決定されていて、我々に許された自由度は極めて限られた範囲でしかないと判った時には、全く何ということと、拍子抜けもし、腹立たしくも感じさせられた次第である。

しかし、日程の終りの方で、スイスや西独にも一寸は立ち寄ることになっていることでもあり、何よりも今回の権利を放棄してしまったら、二度とこのような機会が与えられるかどうかともわからないと、気をとり直して、積極的に取り組むことに肚を決めたのであった。

取り組みの構え 立ち上りの、思いも寄らぬつまづきで、出端をくじかれた感じであったが、肚も据ると、この機会を十分に活用してやろうという意欲も出てきて、メキシコやアメリカの教育をはじめ、訪問を予定している国々や都市の風土、歴史、文化などについてもその概略くらいはと。夏休みの自由な時間の大半は、そちらに振り向けた。英会話の錆落しも、テレビや本もあれこれに当って心掛けたが、新書版のほとんどは、その書名のアピールほどの効能はなく、むしろ羊頭狗肉の感を強くした中に、1カ月の旅行を了えた段階で、本当に役立ったという実感の残ったのは室勝氏著の English Talks for You in 500 Words と、Oxford の English Reader's Dictionary であった。(ことのついでに、身ぶり手まねをフルに活用した、英語以外の片言で何とかという場面では、jtb の Pocket Interpreter に大変お世話になったことを付言しておく)。

そして旅行中の具体的心構えとしては、折角の機会、いろいろな先入観念に惑わされることなく、積極的に現地生活の中に入ってゆくことに心掛け、なるべく自分の足で歩き、一言でもよいから話しかけることに努め、自分の目、自分の耳、自分の膚で在るがままの、それぞれの国の姿を感じ取ってきたいものという点に、ピントが定まってゆくのを感ずるようになった。特に、それぞれの風土と歴史の流れの中に生きて実在する、sein と、それらと現実との葛藤の中で生み出された wollen や sollen との区別を少しでも明らかに見抜き、把握してきたいものといった願いをこめて出発したのであった。

予想以上のつき この年になって初めての海外旅行を経験した戦中派にとっては、出掛ける前には長いようにも感じられたが、旅程の半ばを過ぎる頃からは、またたく間に過ぎ去ってしまった感じの1カ月という決して長くはない旅行であったにも拘わらず、非常に大きな収穫を手にすることができたのは、我々がいろいろな意味で予想以上についていたことに、かなり依存していたように思われる。

第一にすばらしい人柄の団員に恵まれたこと。聞く所によれば今迄の団では、多かれ少なかれトラブルのなかった団は余りなかった様に聞かされてきたが、我

々に関する限り、そのようなことは皆無で終始できたし、経験豊かな添乗員も、「こんなに気持ちよく協力的な雰囲気で行かせて頂いたのは初めて」と、旅行中にも、また帰国後にもお世辞ではなく繰り返ししていたことから推察して頂けよう。

それから、団員の中の二人の通訳の魅力的な人柄と優れた語学力、この点が欠けていたら、公式訪問の場面で、我々が把み得たこと、あるいは先方に与え得たことは、恐らく半減していたに違いない。しかも団員の徹底した自制心から、公式場面以外では自分のことは自分でして、通訳を煩わせないという良識がほとんど完全に守り通されたことも高く評価したいと思う。

さらに、私個人としては、団の記録係を担当させられて、その責任上公式場面での見聞において一段と真面目に取り組まざるを得ず、結果的には、そうでなかったとしたら、多分見落したり、聞きのがしてしまったような点までも把みとることができたし、その上同じ係という縁から、1カ月間のルーム・メイトとして正に寝食を共にすることとなった堀本氏が、取り組みの構え、考え方、趣味（絵画や俳句）のみでなく、歩くことが好きで、見栄とか面倒がり屋からホテルに沈殿するようなことはせず、気軽にスーパー・マーケットや街角の小店にも旅行の第2日から探検に出かけ、気に入ったものを安く手に入れ、適当にアヴェンチュールも楽しみながら心豊かな旅の日々をといった点まで意気投合の仲であり得たことは、本当にいくら感謝しても、し切れない感じである。

天候についてのつきも相当なもので、傘を使用しなければならなかったのは、1カ月の間でパリでのたった半日だけ。それまでがその状態であったからこそ、刻々に変貌する光と陰の壮大な交錯の中でのパリを経験することができ、印象派の生れたのもむべなるかなと肌で感じとることもできたのであった。霧のみでなく、青空のロンドンも体験できたし、メキシコでは毎日午後になると悠大な雲が湧き出て2時間ばかりスコール性の雨がやってくる雨期と、日本の9月の青空のような乾期との境に滞在して、両方を経験できたし、ニューヨーク州では、何故英国式に autumn と呼ばずに fall というかを8日間の短い滞在にも拘らず、見渡す限りの木々が急激に色づき、あっという間に散ってしまうのを目のあたりに見ることができて本当に実感として把握することができたし、しかもその間に呼び名だけでは何かの文学作品で印象に残っていた Indian summer も体験させてもらえるという豪華さ。さらにスイスでは例年より1カ月早い冬の到来に、当初の予定であった、Mt. Piratos の登山こそ阻まれはしたものの、却って、それにかわる見学としての7カントンにわたる1日の高速バスツアーは、素晴らしいもので、

特に1mも雪の降り積ったブリュニック峠の印象は終生忘れることのできないものであった。

自然の外のつきとして特筆に価するのは、日曜日にしか行なわれないメキシコシティの国立劇場での民族舞踊と、プラサ・メヒコでの斗牛、ソチミルコの船遊びとバザールを総て体験できたこと、フランスではパリの近代美術館で、豪華な印象派百年展を鑑賞する機会に恵まれたし、また土曜日の朝市も見ることができた。さらにスイスでは、我々の着いた翌日に、「終に国民人口の22%を占めるに到った外国人労働者による政治・経済両面に及ぶ力を半減する目的で、その数を今後3年間に半減させる」という法案に対する国民投票が行なわれ、しかもこの国民投票は、婦人にも参政権が与えられてから最初のものというスイスの歴史でも今後記念されるべきものであっただけに大変強烈な印象であった。しかも、我々がスイスを発つ日の朝投票の結果が発表され、同法案は否決され、自由なスイスの伝統が保持されたことは、この印象を一層忘れ難いものとして脳裡に焼きつけてくれることとなった。また、我々の泊ったチューリッヒのホテルと眼と鼻の場所に、ソルジェニーツィンの仮住居のあったことも、偶然とはいえ、やはり忘れ難い思い出である。

このように大変恵まれた旅であっただけに、限られた紙数内で、何を、どのようにまとめたかと考えだすと、全く取捨に迷ってしまうというのが、正直なところである。(勿論私と堀本氏が中心となってまとめた公式記録は既に印刷公表されているので、それとの重複はさける。)しかし、充当した日数の面からも、また狭義の教育視察という角度から節にかけても、質・量共に充実していると共に、いろいろ考えさせられたり、教えられたりすることの密度から考えても、群を抜いているメキシコと、アメリカのニューヨーク州での見聞に限定して、まとめてみたいと考える。

ところで、それぞれについて詳述する前に、一言だけ述べておきたいことは、出発前にいろいろの事典をはじめ、かなり専門的な書物の一部にも目を通して、ある程度の予備知識は持って出かけたつもりであったが、それらの資料に述べられていることが間違っているとは言えないまでも、余りにも定性的であり、かつわれわれ日本人の立場から見たものであったり、それほどではないまでも、日本人の生活や日本人の考え方のフィルターを通した形のものが少くないことに、今更のように気づかされ、まさに目を見張る想いであったということである。このような意味で特に強く印象づけられたことを大切に、なるべくその在るがままの姿を伝えるよう配慮しながら整理したものであることをお断りしておく。

II メキシコ

その風土 何しろ日本の5倍の面積を持った国、僅か一週間ばかりの滞在では、その概略さえも把握するのは困難。ここでは我々の訪れた中央高原のメキシコでも最も住みよい地帯にあるメキシコシティとグアダハラおよびそれらの周辺についてのこと。しかしそこにはメキシコ国民の約半数が集中して生活していることも忘れてはならない。それにしても人口密度では、我が国の全国平均よりやや下廻るのだからゆったりしたもの。

中央高原は1500～2000mの標高であるから、緯度では台湾乃至フィリピンに相当するが気温は25℃くらいで大変涼しい。主な交通機関は自動車ということになるが、メキシコシティではその異常集中と、2000mを越える高度のために不完全燃焼の傾向強く、スモッグが多い。人の動きも大変緩慢であるが、これも高度に適応して習性化したものと考えられる。地質はすべてが火山岩、水質の悪さは、日本で育った我々の想像を遥かに絶するもの。どんなに胃腸の丈夫な日本人でも、メキシコの水道の水は勿論、ジュースに入れた氷程度でも2～3日で変調を来すのは確実。

然しよくしたもので、果物は豊富、ビールも安価なので、何とかなるが、やはり日が重なりと苦痛である。主食はとうもろこし、その粉でつくった何も入れないお好み焼きのようなトルテリアをベースにした料理は結構美味。植物も豊富で特に標高のやや低いグアダハラ辺りは緑豊かで美しい。

人種差別はないが…… お隣の米国では人種差別にまつわる厄介な問題が、どうしようもない程にこじれてしまっている感じであるが、現在のメキシコには、人種差別の問題は存在しないと言ってよいようである。かって私達が中学生の頃、地理の時間に繰り返し聞かされた類のメスチゾにからむ問題も、一週間の滞在の間にメキシコシティのレストランで目撃したのが、唯一の例であった。日本人に対しても肌の色から顔立ちまで、随分似ている者も少なくないだけに一般的に好感を持っており、特に、カトリックの歴史を通しての日本との深いかかわりを背景にして精神的にも(平均値として宗教心のメキシコ人より遥かに希薄な我々には、内心、こそばゆい程に)親近感をいだいている人達も少なくないようである。また太平洋戦争で米国と対等の戦いをした民族という(これもいささか面映ゆさを禁じ得ない)理由による親近感など。然しこの数年の日本の経済進出によって、その宗教心の欠如したエコノミック・アニマル振りに嫌悪を感じる鋭い眼を持った人達もいることを忘れてはならないと思う。とにかく、人種問題に関する限り、長い植民地

時代から、独立国、そしてさらに流血革命によって強大な外資の桎梏を断ち切り、地主階級から解放をかちとっていった長い歴史の流れの中で、それを超克しえたと言ってよいように思われる。

しかしながら、形の上では地主から解放されたというものの、近代的な生産性の立ちおくれは全くどこから手をつけるにしても容易なことではなく、「均しからざるを憂う」などという段階よりは、遥かに以前で、何よりも先づ「乏しさからの脱却」が当面の国民的課題といった感じであり、その歪が、新しい革命後の社会のエリートと一般民衆との歴然とした経済的差別を生み出してしまっているようである。勿論その背景として、なまじか広大な国土を保有していることが交通手段の乏しさに直結し、均分しようにも全くお手上げの地域が圧倒的な量を示していることを見落してはならないと思う。

従って現象的には、民主的国家を革命を通して作り上げたメキシコという我々外国人の観念からは、理解に苦しむような乞食が早朝のメキシコシティの大通りにまで散見されるし、メトロなどの地下道には朝から、一方レストランなどには夜おそくまで、汚れ、破れたシャツやズボンをまとった、はだしの小学生の靴磨きがいくらも、といった光景が見られる。一方我々のような旅行者の生活領域ではペソ貨幣が一般的で、センタボ貨幣は容易なことでは手に入らないけれども、市の内外の主要交通機関であるカミオン(バス)は、同一路線に、20センタボス均一のおそらく現在の日本では絶対見られないようなひどい車と、40センタボス均一の準急バス(これは日本の普通のバス程度)、それに1ペソ均一の急行バス(紫外線除けのスモークト・ガラスの窓、冷房付リクライニングシートの日本でも余り見かけないようなデラックスなもの)が、走っているといった状態。また聞くところによると、最近、オリンピック競技場や国立自治大学と前後して、建設された国立児童病院の初診料や入院費は、親の収入に比例して、最低無料から、かなり高額までであるとのこと。このようないくつかの例を通して、この国の為政者の苦心の程が痛い程に感じられる想いであった。

教育について 今回の旅での最初の訪問国であるメキシコの教育について、我々が予備知識として持っていたものの概略は、大体次のようなものであった。

学校制度の基本としては6・3・3・4制がとられているが、かなり細分化され、著しい複線型をなしている。義務教育は、憲法と、'42年の公教育法に基づき、6歳からの子供に対し、6年制の小学校においてなされている。メキシコシティやグアダハラや連邦区や都市では、法規通りのものが多いが、地方農村部では、未だに不完全小学校(3～4年制)も多く残っていて、

教育較差の是正が大きな課題となっている。設置者別では、連邦立、州立、私立などに分かれるが、教育課程や教授要目については、学校種別ごとに国で定められた規準に従うことになっている。といったようなものであった。

ところで、極めて短期間ではあったが、われわれがかなりな時間を充当して、直接訪問したハリスコ州立グアダラハラ大学第2プレパトリア、私立のエスキュール、エンリケ・ディアス・デ・レオンそれに、一般見学の中に織り込んで見学したメキシコシティの国立総合自治大学、チャパラ湖畔の織物の民芸で有名な田舎町ホコテペクの4年制の小学校とささやかな私立のコレジョ、陶器の町アヒヒクで偶然出合って、片言の英語でおしゃべりした下校時の中学生の一団、それと大使館の参事官や現地の日本人会の人達などから得た生の情報は、やはり、われわれの予備知識が、如何に、定性的なものであったかということは勿論、活字を通しての理解というものが、如何に現実や、現地での概念から、ズレたものとなりやすいかということ、痛切に認識させてくれるものばかりであったと言っても、決して過言ではない。

(1) 公称40%の文盲率

メキシコの文盲率については、公式に発表されているものによると、35%~40%ということになっているが、大使館筋の確かな情報によると、この数字には新興国としての背伸び状態がその算定基準に隠されており、実は、不完全小学校修了程度どころではなく、小学校在籍が1カ月以上は、文盲とはしないというベースでの数字とのこと、若し、義務教育卒業というようなきびしい条件をベースとするならば、この値は60%になることは確実とのことであった。

この文盲率削減は、幼児教育の普及と義務教育年限の中学までの延長と共に、三大文教政策となっており、夜間小学校も都市部には開設され、15歳までに小学校を卒業できない者は、ここで義務教育だけは完了させるよう努力することが要請されている。

ところで、この高い文盲率は、経済的較差の条件もさることながら、決定的条件は16人/km²という状態で交通機関も都市とその周辺以外には皆無に近いという状況で広大な国土に分散して生活しているという事実である。首都から30kmばかり離れたティオテワカン遺跡の辺りでさえ、見渡す限りの熔岩風化土の湿地帯に、ウチワサボテンとビルウ（こしょうの木の種類）の外は、草原か、とうもろこし畑か、竜舌蘭畑といった自然の中で、ここに一軒、数100mから時には1kmも離れてまた一軒という状態で、日干し煉瓦の小さな住居が点在しているという条件の下で、どこにどんな学校を作ることができるであろう。仮に学校を作ったとし

ても、そこに徒歩で通学可能な生徒が、何人期待できることになろう。

従って、チャパラ湖畔の昔からの民芸的織物の町として知られているホコテペクでさえも、4年生までの不完全小学校がせい一杯ということになるのである。まして中学に至っては、義務制などということは、交通網の（スクールバスを含め）整備なくしては、文字通り絵に描いた餅という感じである。

(2) 学校は二部制

第二に、メキシコの教育について認識しておく必要のある前提条件は、大学や師範学校は別として、小学校から高校（プレパトリア）に至るまで、すべてが、二部制、中には夜間を含めた三部制さえもあるということである。我々の訪問したグアダラハラ大学の付属第二プレパトリアなどは、メキシコでも最も立派な高校の一つであるが、学校規模からして最初どうしても納得のゆかなかったのは、生徒数2,000、教職員170という数の余りにも大きすぎることであった。しかし、その疑問も校内を一巡してから、手のすいた先生方30名ばかりと2時間余りにわたって（予定では1時間程ということであったが）懇談し合った時に氷解したのである。二部制だから、1,000名を80名ばかりで。それならばこの規模の施設で、かなりの徹底した教育も、と納得できた次第である。

この小~高のすべてが二部制ということは、週当たり授業時数が、我が国の%程度となっているということに直結することも、見落してはならない。前日に訪れた家塾（運動場ゼロ）のような小じんまりした私立のプレパトリアで、高校の2年の用器画の時間に、直線の二等分を1時間もかけてやっているのに、一体どうなっているのかと内心呆れて（とても何故と質問したりする気にはなれなかった）いたことも、この州立のプレパトリアの先生方との話し合いによって一応解決したのであった。

ところで、この二部制の由来を全面的に国の経済的な貧しさの故にすることは問題であって、少なくともその一部には、低地では亜熱帯性気候のため、また一応暮しよい（そして学校の密度も高い）高原地帯は、空気の希薄さの故に、長時間の労働は無理で、長年にわたる生活の智慧として昼食を含めた2時間余りの昼休みが完全な生活習慣となっていることも関係していることも否定できない。さはさりながら、やはり圧倒的な原因が国の、また国民一人一人の経済条件にあることは確かである。小学生も午前中登校する者は午後から中には夜までも、反対に午後登校する者は早朝から昼までは、生きるためには働かなくてはならず、また働くのが当然になっている社会といえるようである。それにしても、ソチミルコの水路に面したみすばらし

い農家の庭に佇んで10本ばかりの手作りの木の実のネックレスを手首にかけて、舟遊びの観光客に向かって買ってほしいとつぶらな瞳で訴えていた小学生になったかならないかくらいのいたいけな少女の姿や、舟遊びを終って舟着き場に観光客が上るのももどかし気に、舟になだれ込んで、後片付けをしながら、食べ残しの昼食や、果物に武者振りついていた裸足の上半身裸の子供達の姿は、眼底に強く焼きつけられて今も思い出す度に心の痛むのを禁じえない。

(3) 民衆教育としての銅像や建築物

このように酷しい教育条件の中で、アステカ帝国以来の民族の誇りと、近代国家としての脱皮の急務であることを、折あるごとに文盲率の高い民衆に訴えてゆく有効な手段として評価も定まり、それだけに、外からの訪問者には異様な程の現象として眼に映るのは、小はコインから大は銅像、壁画、建築にまで及ぶ徹底した視覚を通しての為政者側のアピールである。

コインのデザインは、その総てがアステックから、独立、そして流血革命の英雄の肖像または遺跡を、小額から高額へと振り当てた構成となっており、首都のメキシコシティは桁外れて高密度であるが、その他の都市についても、公園や広場には勿論のこと、一寸したロータリーにまでメキシコの歴史的人物の銅像や記念像を中心とした記念塔が置かれ、それぞれの名称として使用されているばかりでなく、メキシコシティのレフォルマ大通りや、あちらこちらの公園には、世界歴史の上でも重要な役割りを果たした政治家・文化人(中にはベートヴェンまで含まれる)の銅像や胸像までといった徹底振り。

一方、連邦や州の政庁の壁面や天井はいうまでもないことながら、大学の巨大な建物の壁面から、百貨店の前面や、一流ホテルのホールの壁まで、リベラ、オロスコ、タマヨなど現代一流の画家によるモザイク画や大壁画で飾り立てられ、否応なしに強烈な訴えかけをしている。

この国での最高のエリートは農業技術者、次いで建築技師、それから医師という序列も、このような背景の把握の上ではじめて理解できようというものである。

(4) 教育のバックボーンとしてのカトリック思想と、徹底した非アメリカ化教育

上述のメキシコの教育の制度的、現象的その他の外面的な特徴に対して、その教育の根幹をなすものとしては、全国民の95%までが、カトリック信者という、精神的風土を基盤として重厚な比重を感じさせられるカトリック思想が第一。そしてもう一つは、スペインによる苛烈を極めた収奪の植民地時代、それをはねのけて独立はしたものの、米、佛、西の三国による干渉の苦難の時代、そして流血革命と、どれ一つをとり上

げてみても並々ならぬ困難を乗り越えてかち取ってきた政治的自由を、堅持しさらに発展させてゆくためには、経済的自由の確立も、それに劣らぬ重要性を持つものとの民族的自覚の上に、地理的にも隣接し、米墨戦争以来100余年にわたって支配を受けて来た米国の経済資本からの独立を志向する動きは、石油資源の国有化に成功して以来とみに烈しくなっているようである。その一連の動きの、教育文化の面への現れは、英語は身につけるが、米国资本に奉仕するためではないとのけじめをはっきりさせていることで、その徹底振りは、観光客などで圧倒的な数を占めるのは勿論米国人なのであるが、道路標識は勿論、看板から商品の包装からラベルに至るまで、スペイン語のみで、一片の英語も見られないといった徹底の仕方。また訪問した州立高校で校長の公式の挨拶は勿論、座談までスペイン語で通すという硬骨漢振り(勿論こちら側からのたどたどしい英語も十二分に通じて、打てば響く答がスペイン語で返ってくるのであるから)。その気迫には心から打たれ、教えられるものがあつた。

(5) まさに明治維新時代の日本

以上を総合すると、まさに明治維新時代の日本も、現象的にも、内面的にも恐らくこの通りであったのではないかとの実感を強くした次第である。

4年制の義務教育の尋常小学校の就学率さえ、一步都市の外に出れば急落する状態であり、何よりも近代技術を身につけた者が尊重され、エリート化し、中学教育は都市に限定され、伝統技術は徒弟制度によって保持せられ、高等教育は大学に直結した予備門(プレパトリア)であり、能力さえあれば高校から大学へは進学は容易、しかし大学を卒業することは、並大抵のことではない(入学100に対し、順調に卒業してゆく者は20~30の比率とのこと)。それだけに大学、特に全国で唯一校の国立総合自治大学の卒業生は(1年間、専門の領域で公務員として勤務しないこと、卒論を書く資格が与えられない)、20代でも月1,000ドルもの高給を与えられる程優遇されている。このようなことのどれをとってみても、100年前の興国の意気に燃えていた我が国の姿を髣髴させるに充分なものがあつた。

しかも、現在の我々が、もっと、しっかりしなくてはと自戒したのは、上からの帝国主義的富国強兵策の方向での興国の意気ではなく、民族の力でかちとった民主的共和政体の下での興国の気迫の漲りであるからである。今から10年、20年後にメキシコと、遜色なく次の時代を荷ってゆける若者の育成の責務の重大さに改めて身の引きしめる想いであつた。

III ニュヨーク州

檻と鍵の街 メキシコへの中継点ロスで2泊した

時には、二日目の朝、日本へ帰る予定の建築技師（1カ月ばかり東部での会社の用務を済ませて）が、部屋からロビーまでのエレベーターで移動する間に、大事なスーツケース一つを盗まれたと青くなっておられるのを目撃して、これは大変なところ、出国前に注意をうけていたことは相当な確率で起りうることなのだ、注意しなくてはという程度の感じであった。それから1週間、屋外で落したり置き忘れたりした物は、絶対出て来ないけれども、屋内、特に一流ホテル内は絶対に安全といわれ、ゆったりと寛いだ気分ですらなく送ったメキシコでの滞在を終って、ダラスに着くと同時に、これは大変なところという実感がひしひしとおし寄せてくるのを感じないではおられなかった。

一見ゆったりとして豪華なホテルのフロントロビーから、エレベーターで割り当てられた自室の階に出た途端、厚い絨緞の踏み心地とは裏腹に、何と冷々として機械的な廊下のたたずまいであろう。両側にそれぞれ10以上も並んだ客室のドアの嚴重さ。まさに金庫のみである。おまけにそれがずらりと並んでいるところは、我々の経験の枠で最も近いのは、火葬場のあれである。何か背筋の寒くなるような感じであった。

部屋に入って見るとまた驚いたことに、常識的な位置の外に上下に各一つ、計三つの錠が、その上岩乗な鍵錠まで。これ程までにしなければ生命財産が保証し兼ねるとは。大抵のテレビ番組や映画に出てくるあちらものは、かなりの演出上の鼓張が常識と聞いていたが、この点に関する限り、事実の方がフィクションを上廻っている感じであった。

おっかなびっくりで、部屋で夕食を済まして、はるか階下の街路の様子を眺めていると、つい先刻まで夕刻のラッシュアワーで混雑していたホテル前的大通りが未だ陽の沈んだばかりというのに、文事通り人っ子一人通らない状態、車さえも1分間に1〜2台が高速で通りすぎる以外はほとんど見られない。たまに歩行者がと、よく見れば、すべて黒人ばかり。朝も6時半頃からぼつりぼつり歩行者が現われるが、やはり黒人がほとんど。7時頃10分ばかり観察し続けていた間に白人は二人きり。黒人はおそらくその100倍程度。

ニューヨークのマッドハットン地区は、流石にこれ程ではないが、暗くなつてからの一人歩きは生命の保証が致しかねると言われている現在のニューヨーク。そして、地下鉄は昼でも旅行者が一人で利用するのは、絶対に危険。ハーレムは、ウィークディに車で通り抜けるだけでも……等々。

そして、それらが単に注意させるための例え話とか、おどしでない証拠に、新聞やテレビニュースで毎日のようにその種の被害例が報道されているのである。

ダラスからはケネディ空港に降りたのであるが、バ

スで7番街のホテルまでの30分ばかりに、車窓から見た明るい光の洪水とは対蹠的な街路の両面のビルの一階はほとんど、時には二階にまでも見られる異様な風景、それは大きな窓という窓に、まるで刑務所を連想させる様な鉄格子がはめられていることであった。勿論ギャングスター防止のための自衛手段。

現地で商社を経営している日本人から聞いたことであるが、10年前までは家の表のドアを明けたままでも心配なかったし、数年前までは家の前に置いた車のドアをいちいちロックする必要はなかったが今はとてもないこと。このところニューヨークでの錠前の売り上げの伸びは年々200%の割、合い鍵を持たない人は入ることのできないビルも少なくない。錠の所持が法的に許されている関係で、最近の推定では、全米の平均で、80%以上の家庭で拳銃が発射できる状態になっているとも言われているとのこと。

このような荒廃の原因は？

潜在的な素地は、やはりアメリカの建国以来の病根である人種問題。平均値としての黒人の教養の低さは、低収入とも直結し、車さえ持てないという条件から、仕事場に近い旧市内の、古くて格安な住居に住むようになる確率が高く、こうして黒人の一家族が入居したアパートからは、白人は次第に転居してしまい、その跡にまた黒人が、という調子で黒人ハーレムが形成されてゆく。さらに黒人街の近くの白人は、郊外にゆったりした住居を作り転居、さらに黒人街が拡大という公式は、いろいろな意味で古き良きアメリカの面影を保っているニューヨーク州の州都オーバニーでさえも例外ではあり得ない。

一方、この黒人の代入による一種のドーナツ化現象が、最近数年の間に急速に加速され、ニューヨーク、シカゴ、ボストンからダラス辺りまで、手の施しようもない程の犯罪都市として荒廃させてしまったのは、ベトナムでの大義なき戦いの後遺症のようである。割り切れない目的不明確の状態で前線にかり出された米兵の多くは、麻薬常習者として帰国、特に大幅な介入停止により一時に大量に帰国した兵士のかなりが失職状態となり、その比率は黒人兵の場合には特に圧倒的で、これが、職を求めて都市に流入、今日の結果を生み出すことになった様である。しかも、さらに悪いことには、その背後にマフィアと大製薬会社が、からんでいるため、マルセイユ辺りで1kgが400ドル程度で入手されたモルヒネが、密輸されヘロインに加工され、ニューヨークの末端で常習者に渡る段階では1gで500ドルにもなるのだそうで、常習者の数はブロンクス地区などでは人口の約1/3は確実というのだから絶望的である。しかも常習者ともなれば1gでは10日とは持たないのだそうであるから、麻薬のための盗みだけでも

ニューヨークで日に500万ドルはという試算もある程。

ニューヨーク州の教育

(1) 深く根を下した民主教育の伝統

足かけ3日のニューヨーク滞在から解放されて、米国独立時代の史蹟が連続しているようなハドソン河の峡谷を、急速に秋色の深まる大自然の景観を満喫しながらさかのぼった1日の高速バスの旅は、大袈裟のようであるが、本当に生けるしるしありと言った感じであった。

こうして訪れたニューヨーク州都のオーバニーは、古き良きアメリカが尚ここには健康に生きていることを感じさせられ、救われた気持であった。

1784年に、米国最初の公教育責任機関として発足し、爾来2世紀にわたって民主教育の伝統を守り育ててきた誇りに生きるニューヨーク州立大学理事会の事務局である州教育局の訪問から、われわれのオーバニーでの研修は始められた。教育局長のナイケスト博士をはじめ、ビットナー次長、国際交流担当官のヒュジェズ女史をはじめ何人かの指導主事その他について、1日半の充実した日程であった。

特に強く印象づけられたのは、アメリカにおける、四権分立の思想で、所謂三権から完全に独立した形で教育権の堅持と施行の責任を担当するのがリージェントと呼ぶ15人の理事会構成員で、教育局長もこの理事会が任命する仕組みになっている。そして教育局長は同時に州立大学の総長も兼任することになっているが、米国の州立大学なるものについての私の不勉強からの認識不足もこの機会にはっきりと修正された。それはニューヨーク州内に分布する3箇所のUniversity Center, 15箇所の4年制総合Campus, 6つの農工短大, 5つの法律短大, 30の地域短大, 1つの特殊教育短大と2つの厚生科学センターという、ぼう大な組織の統合体の意味であった。

それからもう一つ明記しておく必要があると思うのは、教育権なるものの範囲、具体的には教育局長の行政責任領域であるが、それは我が国の文部大臣や教育長のそれよりも、はるかに広大で、公立・私立・教会立の各学校と図書館・博物館に留まらず、資格ないしは免許を必要とする全職種（ただし弁護士は司法権の下にあるので除く）と生涯教育に関連する行政に及んでいる。

また15名のRegentsは、教育関係外の職種の候補者について11選挙区から1名ずつ、外に州全域から4名を選挙する仕組みになっている。また教育局自体の予算は、州予算の一部として計上されるが、高校までの公立学校の公費は、地域支持の原則から住民税の%がこれに充当され、その80%くらいが州費から、さらにその10%くらいが連邦から支出されるとのことであ

った。

(2) 初等中等教育

ニューヨーク州の初等中等教育を担当する公立学校は、すべて地区学校群として編成されており、オーバニー周辺にも3つの校区があったが、我々はその代表的な一つR. C. S. 校区を一日かけて見学した。校区は2つの初級小学校、(幼, 1, 2年), 2つの上級小学校(3, 4, 5年)中学校(6, 7, 8年)と高校(9, 10, 11, 12年)より成り、全入総合制。なお各校には校長がそして総てをまとめた総合責任者として、学校群長までである制度上の配慮にはかなりな年輪が感じとられた。

義務制の9年目(高校1年)の終了の段階で州の行なう、Regent Testなるものがあり、その結果に応じて、オーナー(大学初年級程度まで高校のうちに教育)、リージェント(大学入試の共通試験にはパスできる見込みの者を教育)、プロフェッショナル(職業教育に重点を置いた教育)、サティスファクトリー(最低必要程度の高校教育)、ヴォケーショナル(職業訓練に主体をおく)の5段階に別けて、教育をしている。しかし、これは完全な振り分けではなく、本人の能力の変化、本人および家庭の希望などに応じて、かなり弾力性を持たせて運営されているとのことであった。

特に、全入制をとる以上、能力に較差の生じることには、高校程度ともなれば当然との受けとめに立って、画一的な教育、教材、課程による個性の伸展の阻害を配慮し、余裕のある者には、その力を充分に発揮する道を設け、その反面、slow learnerや、低知能の生徒も、それぞれ社会人として一人立ちできる最低必要の学力を、slow paceで付与する努力もし、また職業訓練と特殊教育を主体としたクラスまで設けるなど、その教育的配慮と教育的責任の在り方のきめ細かさには、流石と感服させられた次第である。

また、高校生の90%以上は、スクールバスによる通学をしているとのことであったが、その中にはいろいろの広告が見られたが、よく見るとその一つ一つが、生徒指導に関する教育局や地域機関関係のものであったことは、印象的であった。(その内容は進学・就職の道の広さと、その多様さについて考えさせ、必要ならばいつでも相談にいらっしやいといったものから、明日ではおそすぎるとの訴え、さらに家族計画について考えようという訴えや妊娠の心配のある人はためらわないで先づ相談にといった地区保健委員会の訴えまで)。まさに地域ぐるみで、次の世代を育成してゆくといった構えと、がっしりとした取り組みの一断面を見せて貰えたという感じであった。

(3) Arber Hill Elementary School

——思い切った教育実験——

この項の書き出しに、くどすぎると思われそうなほ

どに、現代のアメリカのかかえる病根に触れたが、そのような傾向は、代表的な古きよき時代のアメリカを見るようなオーバニーにも現われはじめ、シャイラーマンション付近の黒人街化が進行し、その辺りでは貧しさの故に、両親が早朝から働きに出てしまって、朝食さえ十分に与えられず、まして小学校にも、といった子供達が目に余る程になってきたのだそうである。

これを放置すれば、知能とは無関係に、完全に経済的マイナスの条件によってのみ、みすみす不幸な子供やがては不幸な大人を生み出し、ニューヨークの轍を踏むことになり兼ねない。それを何とかして喰い止めたいと、教育局、州立大学の専門家などの衆知を絞って生みだされたのが、Arber Hill Elementary School であるとのこと。

3年前、1,400万ドルかけて建設された、定員1,200（現在は約950人）の、構造的にはOpen space 学校で、内部の固定間仕切りは一切設けなくて、目的と規模に応じて、独特の工夫が加えられた家具その他を活用して、任意の数多くの学習空間が創り出せるように工夫されている。

ここに収容されている生徒の条件は、朝食も満足には食べさせて貰えない4～13歳の子供、年上の子供についてはなるべく能率的に（学令などには拘わらず）

中学に進学させうるだけの学力をつけ、あとは学区のハイスクールに任せることをねらいとしている。従って、算数と読みの能力によって、3つのグレードに分け、教育の進度に応じて上位のグループに移してゆくといったガイダンス・クリニカル・クラスである。

教師についても、グループ担当教師・遊撃教師・援助教師・コンサルタントチームなどの専門化と協力体制が工夫され、大変意欲的な教育が行なわれている。

教育施設の面でも、体育館・芸術空間・理科空間・声楽室・器楽室・工作室・教材センターライブラリー、視聴覚サービスセンター、食堂兼講堂など、それぞれ独創的なものが少なくなく、大きな教育効果が期待されそうである。

結果については、設立されて未だ日も浅いことであるので、未知数が少なくないとはいえるものの、これだけの施設を全く新しい教育実験のために、思い切って新設し、自信に満ちた若々しいスタッフを揃えて取り組んでゆけるという、米国における公教育の底力と、特にニューヨーク・ダラスなどの絶望的状况を10年、20年後には、食いとめ、建てなおしてみせようという、民主主義的復原力とでも呼びたい素晴らしいものを見せられた感じで、今回の旅行の最大の収穫であったと思う。